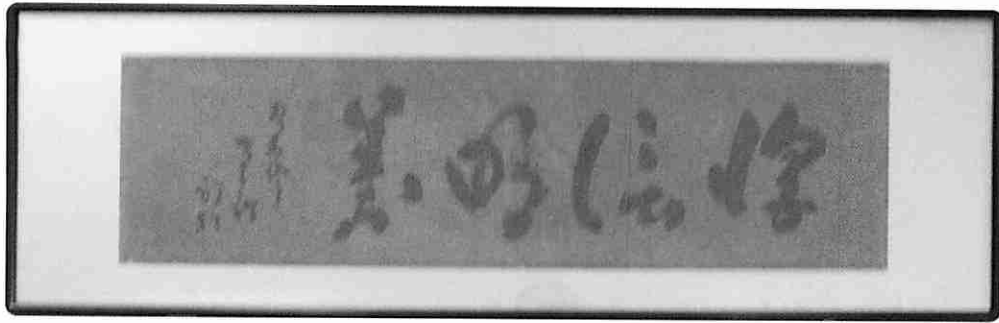


惇明校のあゆみ

校名の由来…「惇信明義」



惇明館(惇明校)の「惇明」の名は漢の『書経』の中の「惇信明義」信ヲ惇クシテ義ヲ明ラカニスからとったもので、信義の教えを実践しようとするものです。

惇明小学校の前身は、福知山藩の藩校『惇明館』です。『惇明館』は明治4年(1871)に藩校としては廃止され、明治6年(1873)に新教育制度のもとで公教育の学校『惇明小学校』として生まれ変わっています。

朽木氏7代藩主(1780-1787) 朽木鋪綱(くつきのぶつな)は、天明年中(1781-1787)に藩士教育のため学館の建設を計画し「惇明」の名を用いようとしていましたが実現できませんでした。

文化6年(1809)朽木氏10代藩主 綱方(つなかた)は、代々藩主の宿願であった藩校を開設し鋪綱の意志をついで「惇明館」の名をつけました。

「惇明」のもととなった「惇信明義」の意味は、「信とは己が言をふみ行う(言行一致・知行合一)であり、「義とは己が分を尽くす(自分の役割を果たす)と解釈され、今も私たちの生き方を問う深い意味を持つように思います。

校章の由来…  
朽木氏の家紋を基本に

福知山藩の藩主 朽木氏の家紋「四目結(よつめゆい)」を基にしたものです。

本来「四目結」というのは、正方形が四つ目になっていますが、本校の学校名の由来である「惇信明義」の「惇」の字を入れるのに、形を整え「菱形」にしたものだとはいわれています。

ちなみに、「四目結」は織田信長と争ったことで有名な六角氏など近江源氏の家紋で朽木氏もその流れをくむ武士団でした。



## 惇明小学校校歌

作詞 荒木良雄  
作曲 諸井三郎

一 青くかすんで そびえる山が  
ぐるりかこんだ そのまん中に  
名も惇明と 美しい  
わが学校は たっている

二 強く明るく 大きくのびよ  
校訓むねに わすれず守り  
名も惇明と 美しい  
わが学校へ 通うのだ

三 まなびの道に みんな仲よく  
つとめてやまぬ 心のひかり  
名も惇明と 美しい  
わが学校は みちている

惇明小学校には、昭和4年(1929)12月10日制定された古い校歌がありました。同24年(1949)2月18日現在の校歌を制定、記念学習発表会を行い校歌の歌い初めをしています。

歌詞は、敗戦から立ち直り新生日本をめざす当時の雰囲気や反映したのでしょうか、ぐんと現代的な内容になっています。

この新しい校歌が作られたのと同時に、校訓も旧の校訓に変わり新しい校訓『強く 明るく 大きく 伸びよ』が制定されましたが、旧校歌と同じようにこの校訓を校歌の中に織り込んでいます。

(注)校歌は校訓と共に新しく作り直されたが、校内に制定委員会が設置されて度重なる検討を経て制定された。

作詞の荒木良雄氏(1890-1969)は、昭和時代の国文学者で大正15年(1926)まで福知山高校(当時、京都府立第三中学校Ⅱ福知山中学)で国文担当の教師でした。本校以外にも市内の学校の校歌も手がけています。明治23年(1890)9月5日福知山市堀の生まれ。京都府立第三中学校(現福知山高校)を卒業。小学校の訓導などを経て大正15年(1926)まで検定京都府立第三中学教諭、昭和5年(1930)姫路高教員。戦後、同24年(1949)には神戸大教授、後に甲南大教授をつとめられました。中世文学の実証的研究で知られ

ています。同44年(1969)9月29日死去。79歳。著作に「中世文学の形成と発展」「宗祇(そうぎ)」「心敬」など。

作曲の諸井三郎氏(1903-1977)は、東京の有名な音楽家。東京生まれで、幼少時よりピアノをはじめ、旧制東京高等師範学校附属中学校(現・筑波大学附属中学校・高等学校)在学時にピアノリストを志しました。旧制浦和高等学校を経て東京帝国大学文学部卒業。

東大在籍中にヴィリ・バルダスとレオニード・コハンスキにピアノを師事。河上徹太郎、三好達治、小林秀雄、中原中也、大岡昇平らと親交を持つ。昭和7年(1932)から同9年(1934)までベルリン高等音楽学校に留学し、作曲を学んでいます。同40年(1965)から同51年(1976)まで東京都交響楽団音楽監督をつとめられました。

旧惇明校校歌

作詞 芦田恵之助  
作曲 佐々木 英

- 一 永遠の命を受けて  
うまれし我等思へばうれし  
惇信明義ただ一すじに  
道を求めてつとめなん
- 二 永遠の命を受けて  
学びにはげむ我等はうれし  
堅忍持久ただ一心に  
道を求めてすすみなん
- 三 永遠の命を受けて  
御国に尽くす我等はうれし  
純忠至誠力のかぎり  
おのが使命をはたしなん

『福知山市惇明国民学校 学校要覧』に、「昭和4年12月10日 文部省ヨリ校歌認可サル」とあります。本校の沿革史には、この日の記録に「校歌始唱式ヲ舉行ス」とあるので、お披露目(うたい初め)の式をしたと思われます。

当時の校訓は『惇信明義 堅忍持久 純忠至誠』であり校歌に織り込まれ、戦後昭和23年(1948)に現在の校訓「強く 明るく 大きく 伸びよ」が定められるまで、時々児童に教えられ、同窓の人たちの脳裏に深く刻まれています。

作詞の芦田恵之助氏は、惇明小学校の教員で、国語教育の第一人者として全国的に知られていました。

明治29年(1896)「丙申へいしん」ひのえさるの年(8月4日)に福知山を襲った大水害の体験を『丙申水害実況』として記して復興のための浄財を広く募りました。これが全国的に知られ、貴重な記録として高い評価を得ています。このように実体験を文章にする体験から、児童が実感を書く「随意選題」という綴方の指導を始められました。やがて綴り方教育の先駆者として全国に名を馳せることとなりました。また、どの子ども読み方が深まる「七変化の教式」を考案し、全国の学校でその授業を公開するなど、国語教育を深め続けました。研究誌「同志同行」を毎月5000部以上発行。『芦田恵之助国語教育全集』全25巻があります。

惇明育友会歌

昭和30年10月13日制定

作詞 真下紀美恵  
作曲 芦田 三郎

- 一 学びの道を すこやかに  
ひらかせてゆく  
のばしてゆく  
ああ 惇明 惇明育友会  
吾等務めの 大いさよ
- 二 子等と手をとる この道の  
けわしいいばら  
越えてゆく  
ああ 惇明 惇明育友会  
吾等務めの 楽しさよ
- 三 みんな仲よく うれいなく  
み空あおいで  
ああ 惇明 惇明育友会  
吾等務めの 喜びよ

惇明行進曲

作詞 池部 清  
作曲 遠山京郎

- 一 高くそびえる鬼ヶ城  
清く流れる由良の川  
自然のめぐみ身にうけて  
あ、強く強く のびる  
惇明 惇明 惇明校
- 二 惇明館の昔から  
古い歴史に新しい  
学びの道をすすみ行く  
あ、明かるく明かるく のびる  
惇明 惇明 惇明校
- 三 文化の国の人として  
世界の友と手をつなぎ  
平和の光求めゆく  
あ、大きく大きく のびる  
惇明 惇明 惇明校

昭和24年(1949)ころ、新しい校歌や校訓を作るなか児童を元氣付けるために行進曲を作る計画ができたようです。選定委員会が設置され広く募集された中、当時惇明校の若手教師であった池部清教諭の詩が採用され、同じく惇明校教諭の遠山京郎教諭が付した曲が選ばれたものです。

昭和26年(1951)9月24日に「歌い初め」されました。池部清氏は、昭和43年(1968)度と45年(1970)度まで惇明小学校第20代校長として活躍されています。

惇明校児童の歌

平成10年5月20日制定

- 一 桜の花の 咲くころが  
私はとても なつかしい  
あこがれ深い 惇明校の  
児童になった 喜びが  
今も心に生きて居るから
- 二 ゆかしい呼び名 惇明よ  
私はそれを 誇りたい  
名声高い 惇明校の  
児童になった その日から  
常にその名を口にしてきた
- 三 時間が流れ 近ごろは  
教えは少し 身についた  
この嬉しさは 惇明校の  
児童になった 賜物と  
いつも心に話かけたい

※PTA創設50周年

❦「惇明館」の開設❦

惇明小学校の前身は、福知山藩の藩校『惇明館』です。朽木氏7代藩主(1780-1787) 朽木鋪綱(くつぎのぶつな)は、天明年中(1781-1787)に藩士教育のため学館の建設を計画し「惇明」の名を用いようとしていましたが実現できませんでした。

文化6年(1809)朽木氏10代藩主 綱方(つなかた)は、代々藩主の宿願であった藩校を開設し鋪綱の意志をついで「惇明館」の名をつけました。

福知山藩主の朽木氏は、歴代学芸に関心が深く、書や美術など芸術分野、儒学や蘭学など学問でも優れた実績を残しています。このため藩士の教育にも関心が高く、藩校の開設から運営まで藩主の思いは深いものがあつたようです。

『惇明館』は明治4年(1871)に藩校としては廃止され、明治6年(1873)に新教育制度のもとで公教育の学校『惇明小学校』として生まれ変わっています。



肖像(軸より)と文書(掛軸)と  
朽木文書「学校五」(右)



❦朽木綱貞と巖溪高台❦

朽木氏6代藩主 朽木綱貞は、学問を奨励するために、当時京都で古学派(儒学の一派)の第一人者であった巖溪高台(いわたにすうたい)を毎月招いて講義を行いました。巖溪高台は、他の藩からも強く誘われていましたが、綱貞の誠意ある要請に応え福知山藩に召し抱えられることになりました。

朽木綱貞は、書や絵画など芸術分野に優れた作品を残していますが、福知山の学問の礎を築く上でも大きな功績を残しました。

巖溪高台は、号は高台、字は敬甫・大允と称し、後に帯刀(たてわき)と名を改めています。播州赤穂の出身で、京都で医学を吉益東洞に学び、後に武田梅庵のもとで儒学を修め、岩垣竜溪の遵古堂の教授となりました。画を池大雅に学び、大雅は書を高台に学んだといわれています。

安永7年(1778)福知山藩から藩学振興のため禄200石をもって招かれました。

惇明館創設後は、その教頭となり祭主となつて積奠(孔子などを祭る儒学の大切な儀式)をおこないました。文化9年(1812)10月死去。その墓は下篠尾の円応寺境内にあります。

惇明館創設に向けて、朽木綱貞と巖溪高台の功績の大きかったことは忘れてはなりません。

❦『惇明館記』と佐藤一斎❦

『惇明館記』は建学の精神と学館経営方針を明示したものとされており、惇明校の所蔵する資料の中でも一番重要なものといえるでしょう。

朽木氏11代藩主 綱條(つなえだ)は、天保2年(1831)当時儒学の第一人者であった佐藤一斎に師事していました。綱條は、一斎に『惇明』と名付けた理由と学問をする意義や目的を記した文章を依頼しました。

本校の校名「惇明」は漢の『書経』の中の「信ヲ惇クシテ義ヲ明ラカニス」からとつたもので、信義の教えを実践しようとしたものともいえます。「信とは己が言をふみ行う(言行一致・知行合一)であり、「義とは己が分を尽くす(自分の役割を果たす)とも理解されます。

この『惇明館記』は、藩士の学術を奨励するために講堂に掲げられていました。



朽木綱條侯の掛け軸「篤敬」

佐藤一斎は、安永元年(1772)10月20日、美濃国岩

村藩士の次男として江戸の藩邸で生まれました。田沼意次が家老となって田沼時代がはじまった年でもあります。朱子学宗家の林述斎から儒学を学び、寛政5年(1793)に幕府直轄の学問所である昌平坂学問所に入門しました。文化2年(1805)には塾長に昇進し、

天保12年(1841)70歳で昌平臺の儒官(総長)を命じられていきます。安政元年(1854)83歳のとき、日米和親条約締結に際し、時の大学頭林復齋(ふくさい)：述斎の(6男)を助け、外交文書の作成などに尽力しましたが、安政6年(1895)9月24日88歳で亡くなっています。

幕府の儒官であり朱子学が専門でしたがその広い見識は陽明学まで及び、門下生は3000人といわれ、弟子には佐久間象山、渡辺華山、横井小楠らと、いずれも幕末に活躍した人材たちがいます。一斎の教えが、幕末から明治維新にかけ、新しい日本をつくっていった指導者たちに多大な影響を与えたといわれています。

平成13年(2001)5月に総理大臣の小泉純一郎氏が衆議院での教育関連法案の審議中に佐藤一斎の著書である言志四録「三学戒」についてふれ、広く注目を集めました。

「少にして学べば、則ち壯にして為すことあり

壯にして学べば、則ち老いて衰えず

老いて学べば、則ち死して朽ちず」

惇明館記



惇明館記(直訳)

福知山老候(第十代綱方公)ノ始メテ立ツヤ、篤ク治務ニ志シ、躬行シテ以テ民ニ率先セント欲ス。其ノ教化ノ本ハ學校ニ在ルヲ以テスルヤ、乃チ命ジテ一館ヲ城西ニ營ミテ以テ講習ノ所ト為シ、人材ヲ隣選シテ學職ニ任ジ、闔藩ノ子弟ヲシテ日ニ業ニ就カシム。此ニ於テ其ノ館ヲ名ツケテ惇明トイフ。初メ徳壽公(第七代鋪綱公)天明中ニ在ツテ既ニ覺舎ノ舉アリ。時ニ預メ其ノ名ヲ選ビ將ニ惇明ノ字ヲ用ヒントス。館未ダ成ラズシテ公即チ逝キヌ。今其ノ遺意ニ從ヒ、乃チ此レヲ以テ之ニ名ツケタリ。事文化二年乙丑ニ在リ。既ニシテ老候病ヲ以テ致仕スルコト二十餘年ナリ。物換ニ時移リ而シテ此館替ラズ。今候(第十一代綱條公)克ク前志ヲ繼ギ、其ノ學政ニ於ケルヤ將ニ其ノ未ダ盡クサザル旨ヲ聞キテ以テ之ヲ修明セントス。館偶サカ未ダ記有ラズ。因テ坦ニ屬シテ其ノ館ニ名ツクル所以テ、之ヲ修明スル所以トヲ記シテ以テ士子ニ諒グルナリ。願フニ坦嘗ヲ知ラ老候ニ受ケ、今候ニ於テハ最モ眷愛ヲ辱ウス。今日ノ微、安ンゾ辞スベケンヤ。乃チ之方言ヲ為シテ曰ク、學校ノ設ケタルハ夫ノ人道ヲ講明スル所以ナリ。人道ニ五ツ有リ。曰ク父子、曰ク君臣、曰ク夫婦、曰ク長幼、曰ク朋友、此レ天下ノ達道ナリ。其ノ徳ニ三ツ有リ。曰ク智、曰ク仁、曰ク勇。此レ天下ノ此達徳ナリ。其ノ之ヲ講明スル所以ノ者モ亦五ツ有リ。曰ク博學、曰ク審問、曰ク慎思、曰ク明辨、曰ク篤行、此レ學ヲ為ムルノ條目ナリ。古ノ教フル者ハ此レヲ以テ教ト為シ、學者ハ此レヲ以テ學ト為セリ。即チ徳成ツテ材達シ、體立チテ而行ハレ、人倫上ニ明カニシテ小民下ニ親シム。乃チ上下相輔ラギテ、信以テ惇ク、禮俗相與ニシテ義以テ明カニ、士民翁然トシテ

仁讓ノ風ヲ興起スルニ至ル者、其レ此レ之ニ繇ラスヤ。書ニ曰ク、信ヲ悼クシ義ヲ明カニスト。先候ノ取りテ以テ名ツクル所ノ意、蓋シ此ノ如シ。士子其レ從事スル所ヲ知ラザルベケンヤ。然リト雖モ猶ホ言フベキコト有リ。今ノ學ヲ講スル者、誰カ明倫ヲ以テ本ト為スト謂ハザラン。而シテ其ノ為ス所ハ率テ口耳ノ講説ニ過グザルノミ。故ニ其ノ聞見ノ博モ。講説ノ辨モ。亦惟道聽途説ニ埒ギラレ、或ハ甚シキハ撒ヲ長シ非ヲ飾リテ教化ノ萬ニ補ヒ無キニ至レリ。即チ學校ノ教ハ遂虚設タルノミ。其レ必ズ身心ヲ以テ之ヲ講明シテ後、其ノ學問思辨皆篤行ノ在ル所タルヲ見ル。乃チ知行ヲ同功ニ等シウシ、身心ヲ一體ニ攝ヌ。是レ今候ノ之ヲ修明スル所以ノ意ナリ。士子其レ亦務ムル所ヲ知ラザルベケンヤ。抑余ハ士子ノ為ニ申ネテ之ヲ言ハシ。曰ク學ヲ為ス苟モ口耳ニ在ルノミトセバ即チ講明ハ惟此ノ館ニテ足ルノミナラン。必ズ身心ヲ以テセントセバ即チ朝晝暮夜、起居食息、適ク所トシテ講明ノ地ニ非ザルハナシ、適ク所トシテ講明ノ地ニ非ザルハナシ。即チ適ク所トシテ修明ノ館ニ非ザルハナキナリ。士子其レ家ヲ視テ以テ此館ト為スモ可ナリ。國ヲ視テ以テ此館ト為スモ可ナリ。天下ヲ視テ以テ此館ヲ為スモ可ナリ。是レ即チ余ノ士子ニ諒グル所以ニシテ、乃チ今候ノ士子ニ望ム所以、即チ老候ノ此館ヲ設ケシ所以ナリ。士子其レ之レヲ識セヨ。

天保二年辛卯十月中澁

江都 佐藤 坦 謹記

惇明館記(訳)

福知山藩朽木第十代(一八〇三—一八二二)綱方(つな)かた)公が、藩主となつたとき、良い政治を行うと決意され、躬行(自分自身が実行)して民を率いて行きたいと願われた。

その教化の基本は学校にあるので、城の西側に講習のための館(建物)を用意させ、人材を選んで学職に任命して、閩藩(藩全体)の子弟に学習させた。

ここに、この館を「惇明」と名づけた。

かつて徳壽公(第七代藩主(一七八〇—一七八九)鋪綱(のぶつな)公)が天明年間(一七八一—一七八八)に学舎を設けようと計画し、その時に「惇明」という名を選んでいった。しかし、設立にはいたらず亡くなられてしまった。

今、その遺志を引き継いで、その名を付けたものである。

文化二年(一八〇五)のことであった。(実際の開校は、文化六年—一八〇九)

すでに第十代綱方公は、病気のため引退されて二十余年が経過し、物も変わり時代も変わったが惇明館は変わっていない。

今の第十一代(一八二〇—一八三六)綱條(つなえだ)

公は、よく志を引き継がれ、学校の運営方針が定まっていなかったため、その研究により運営方針を確立しようとされた。まだ基本方針である館記もなかった。

それで、私(佐藤 坦)に依頼されて、命名のいわれや意味、これを学び明らかにすることの意義を文章化し、子弟らに示そうというものである。

振り返って見ると私(佐藤 坦)は、第十代綱方公に知り合い親しくしていただき、今の第十二代綱條公には本当に大事にしていたに違いない。今回の依頼は断ることができない大事なものである。

それでは、ここに明文化しておくこととする。

学校創立の目的は「人の道」を教え明らかにすることにある。

「人の道」には五つある。

- その一は「父子」である。(親子の道は孝である。)
  - その二は「君臣」である。(藩主・家臣の道は忠である。)
  - その三は「夫婦」である。(夫・妻の道は和である。)
  - その四は「長幼」である。(長・幼の道は序である。)
  - その五は「朋友」である。(親友相互の道は信である。)
- これは天下の達道(五達道)いかなる場合にも行われるべき人間の道である。

人の道を行うための「人の徳」には三つある。



「智」「仁」「勇」

これは天下の達徳(三達徳)世界中にあまなく通用する徳である。

人の道を学び明らかにするためには五つの要素がある。

その一は「博学」(広く学問に通じていること。)

その二は「審問」(つまびらかに問い質すこと。)

その三は「慎思」(深く考えること。)

その四は「明弁」(明らかにわきまえること。)

その五は「篤行」(真面目な人情厚い行い。)

学問を修めるものの五條目である。

昔から教師はこれを教えとし、生徒はこれを学んできた。

すなわち徳が身について人材となつて、実行されるようになり、指導的立場にあるものが、人倫を明らかにしていれば皆ついてくるものである。

いろいろな人が集まり、信頼を悼(あこ)く、みな一緒に義を大事にすれば、みな大らかで譲り合うようになる。それが人の道である。

書経に「信を悼くし 義を明らかにす」とあり、第七代藩主綱公が「悼明」と名づけた意味はここににある。

学ぶものは、このことを知っていて当然ではあるが、な

今、学問を教えるもので、人のおこなうべき道をあきらかにしようと(明倫)するものがあるのだろうか。

口先だけ、聞くだけ、単なる講義をして聞くだけに終わっているのではないか。

その見聞した知識も、講義の内容も、単なる「道徳論」つまり口先だけの受け売りである。

ひどいものになると、おこりたかぶり、間違いを教えたり、ほとんど教育・感化の役に立たないものがある。こうなってしまうと、学校の教育は、うわべだけの空論になつてしまふ。

このためには、実践的に学び明らかにすることが必要である。みな、心のこもった行いのなかで学問の真理に到達するものである。

すなわち知識と実践が偏らないよう、身心を一体にして学問を修めること。これが今の第十一代綱公が修めようとしておられることである。

みなも、この思いや目的を知らないままでもいいのだろうか。

あえて、みんなに重ねて言っておきたい。

学問をするのに、口学問・耳学問だけでよいと言うのであれば、勉学はこの悼明館で十分である。

知識と行動・実践を偏らずに学問しようとするのであれば、朝も昼も夕方も夜も、起きていても座っていて

も食べていても息を止めても、「いっせも」「ごごも」

「何をしていても」学校にならない場所はない。

今、自分のいるところがすべて「悼明館」学校なのである。

自分の家において「悼明館」だと考えることも出来る。

福知山を見て「悼明館」と考えることも出来る。

日本・世界、あらゆる場所が学問の場「悼明館」と考えられるのである。

諸君に私が言いたいのはこのことであるし、今候(第十一代綱公)が、諸君に望んでおられること、そして老候(第十代綱公)が悼明館を創設された訳なのである。

みなさん。どうかこの事をよく理解してください。

天保二年(八三)十月中旬

江戸 佐藤一斎(坦) 謹んで記す

『重修惇明館記』と池田草庵

朽木氏第12代藩主・朽木綱張(つなはる)は、但馬国宿南村(現養父市八鹿町)で私塾を開き著名であった儒学者池田草庵(禎蔵)を招き、自ら直接に講義を聴き藩の学事を奨励しました。

元治元年(1864)惇明館総裁に藩政改革の期待を一身に背負った気鋭の飯田節(みさお)が任せられ、惇明館の雰囲気は昂揚したようです。

この飯田節の要請によって池田禎蔵が『重修惇明館記』を撰述しました。学業の急務たる理由を示し、藩学の基準として講堂に掲げていました。

そこには「天下多事の間、みだりに口耳記誦(暗記を事として実践に欠けひたすら先哲の受け売りする学風)の弊に走るのをやめ、実用を重んじ、施設に役立つ人材を期待する」趣旨が読みとれます。

池田草庵(禎蔵)は、文化10年(1813)但馬国宿南村に生まれ、名を歌藏、通称を禎蔵、草庵と号しました。幼くして父母に死別し、12歳で広谷の満福寺に預けられました。名僧不虛上人の指導で仏学を修め、19歳の時讃岐の儒者相馬九方に会って儒学の道を知り、儒学を学ぶことを生涯の事業としました。

その後、九方に従って京へ上り、一心に研鑽を積み、先学を求め四国や江戸に出て(江戸では佐藤一斎をた

ずねている)、苦学力行の末ようやく儒学者として認められるようになりました。郷里の尊敬と愛慕とを一身に集め、その熱心な要請もあつて郷里宿南村に私塾「青

谿書院」をつくられました。福知山からも入塾した若者も多数あつて、青雲の志を抱いた有為の士を育成されました。明治11年(1878)、66歳で病没。

重修惇明館記



福知山藩ノ学館アルヤ尚シ、其地城西に位し湫隘羃塵且ツ規模陋狭トシテ人意に愜ハズ。而シテ時世変遷シ形勢逼迫セリ士ノ此ノ学ニ資スル者、復タ当時ノ比ニ非ラザルナリ。是ニ於テカ先候錦江公(十二代綱張公)已ニ改制ノ意アリシガ未ダ果サズシテ逝キ以テ今候(十三代為綱公)ニ至レリ。今候乃チ諸老臣ト議シ遂ニ之ヲ城内高燥静曠ノ地ニ移シ其ノ規模ヲ大ニシテ其ノ法制ヲ諱ル。講義ノ堂アリ習字ノ舎アリ、居宿ノ處アリ、夫ノ童稚少年ヨリ以老成ニ及ブマデ皆此ニ就業セザルハナシ。而シテ祠堂ノ殿ヨリ府庫庖爨ノ猥マデ色々具備セリ。将ニ之レヲ以テ益々土風ヲ振ヒ、人材ヲ成就シ以テ国家ノ務ニ應セントス。因テ緝ニ属シテ其ノ由ヲ記セシム。緝甲子ノ歲錦江公ノ招キニ應ジテ始メテ此藩ニ遊ヒ而シテ今候ノ知ヲ辱ウスルコト特ニ厚シ

今茲丁卯ノ秋又未遊シテ以テ其ノ学館ノ改觀ヲ喜ブ。乃チ此ノ属ヤ以テ辞スベカラザルモノアリ。抑館ノ記アルヤ亦已ニ尚シ、而シテ記ノ説クトコ口、夫ノ五達道三達徳ヨリ以テ学問思辨ノ目ニ及ブマデ逐次敍列シテ節々推明セリ。而シテ又徒ラニ口耳記誦ノ弊ニ流ルルヲ慮リ随時随所ニ其ノ功ヲ实用ニスルヲ以テ要ト為セリ。凡ソ士ノカヲ此学ニ盡ス所以ノ者ハ反覆切至シテ詳ナリト謂フベシ。然リ而シテ藩ノ此ノ館アリシ以来士ノ此館ニ遊ブ者、曾テ着実ニ從事シテ此ノ如キ功アリシヤ否ヤ、中ニ誠アレバ